

東京大学教育学部附属中等教育学校 学習相談室の開設

センター教授 市川 伸 一

1. 学習相談室とは

学習相談室は、学習について悩みをもつ生徒のために、学校の教員や教育研究を行っている研究者・学生が相談に応じる場所である。東大附属においては、学校臨床総合教育研究センターの分室の中に、ほっとルーム（カウンセリングルーム）と併置する形で2000年4月に開設された。これは、学校臨床センターの学力問題プロジェクトが発足したときでもあり、このプロジェクトの一環として学力支援の具体的実践を通じて研究することをめざしている。

しかし、こうした活動は、いきなり始められたわけではない。筆者（市川）は、1989年度から1993年度まで東京工業大学（大岡山キャンパス）で、1994年度から1999年度までは、東京大学教育学部において、地域の児童生徒に対する学習相談室を継続して運営してきた。この活動は、「認知カウンセリング」と呼ばれ、現在も学校教員や学生をまじえた月一回の研究会を行っている。認知カウンセリングとは、学習や理解といった認知的問題を抱える人に対するカウンセリングという意味であり、認知心理学や教育心理学の基礎研究と教育をつなぐための実践的研究活動として始められたものである（市川、1993、1998）。

また、1999年には附属教員と協同して、学習相談についてのニーズを調べるアンケート調査や、試行的なケースを実施してきた。2000年度からの設立はこの延長にあるものといえる。ただし、本センターの学力問題プロジェクト終了後にも、継続していくかどうか、また継続する場合の位置付けや運営方法については、あらためて附属学校と協議しながら考えていくことになっている。

2. 活動の目的と方針

学習相談室の目的として、大きくは次の3つをあげることができる。

- (1) 授業時間以外の学習支援サービスを生徒に提供し、学力の向上をはかること
- (2) テストや授業ではとらえにくい生徒の学習上の問題を見出して、授業に生かすための知見を得ること
- (3) 研究者や学生が自ら相談・指導の場をもつことに

よって、教育研究の成果がどのように実践に生かされるのか、また逆に、実践を通じてどのような教育研究が求められるのかを考える機会とすること

相談・指導の方針としては、これまでの「認知カウンセリング」を踏襲している。すなわち、学習者自身が自らの理解状態や学習方法を診断的に見つめなおし、自律的な学習者になっていけるような支援を行うことをめざしている。しかし、実際には、大学の学習相談室で夏休みを中心に行っていたときとは異なり、相談できる時間や人数の制約があり、一人一人に十分な時間をかけて対応することは難しい。これは、のちに述べるように今後の大きな課題であるが、むしろそうした現実的な問題を洗い出し、学校で学習相談活動を行うにはどのような対応が必要かを考えていくことも、運営上の研究課題といえる。

3. 昨年度の活動実績

学習相談室では、申し込みのあった個人または小グループに対する学習相談が活動の中心である。昨年は23名の申し込みがあった。最大7回の相談・指導を受けた生徒もいるが、1回のみケースもある。1回の相談は1時間から1時間半程度で、相談内容は、「教科内容でわからないところがあるので教えてほしい」「苦手な教科があるので、どのように勉強したらいいか悩んでいる」「やる気が出ない、集中できない」などが主なものである。相談員としては、市川と、大学院生の犬塚美輪、村山航が主にあたってきたが、テスト前などには、附属の先生方にもお願いしたケースがいくつかあった。

このほか、夏休みの企画として、「学習法講座」というものを4日間行った。テーマは、市川が「英単語の記憶方法」、大学院生の犬塚美輪が「説明文の読解方法」とりあげ、それぞれ約30名と約10名の参加があった。

4. 今後の活動予定

従来どおりの個別学習相談は、原則として木曜午後2:00-6:00に市川と犬塚が行う予定である。2001年6月末から7月にかけて学習相談室のお知らせを全校生徒に配布し、アンケートを実施したので、来談数は今後やや増えるのではないかと期待される。また、こうした

ケースをやりっぱなしにせず、先生方とケース検討会（カンファレンス）を定期的に行って授業の改善にも結びつくような活動にしていかななくてはいけないと思っている。

なお、夏休みの学習法講座は2001年度は実施しないが、10月以降には、むしろ通常の期間の放課後を使って、小人数セミ方式の講座を実施し、学習支援サービスとして充実させるとともに、新しいタイプの授業開発研究としても位置付けていきたいと考えているところである。また、現在、他の中学校や高校においても、こうした学習相談室を設置して運営を試みているところがあり、筆者らの研究グループの中からも相談員として継続的に活動

している（市川，2001）。運営形態は、それぞれ異なっているが、相互に連絡をとりながら、連携をはかっていきたい。

＜参考文献＞

市川伸一（編）『学習を支える認知カウンセリング』ブレーン出版，1993

市川伸一（編）『認知カウンセリングから見た学習方法の相談と指導』ブレーン出版，1998

市川伸一 認知カウンセリングによる学習支援活動の展開 現代のエスプリ 6月号，pp.92-98，2001